

白志瓶

藤沢周平

白
土
瓶

藤
沢
周
平

文
藝
春
秋

しろ
白き瓶 かめ
小説・長塚節

昭和六十年十一月二十五日 第二刷

著 者 藤沢周平
ふじさわしゅうへい

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話代表(〇三)二六五一二二一

定 価 二〇〇〇円

本文印刷 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

根岸庵
七

初秋の歌
四

亀裂
二五

暗い耀き
二六

婚約
二八

女人幻影 二三

ほろびの光 三四

歌人の死 四〇

主な参考文献

装丁・谷澤美智子

白き瓶^{かめ}

小説・長塚節

根岸庵

一

櫟いちょうや檜ひのに囲まれた農道のそばの空地で、節ふしは体操をしている。もろ肌ぬぎにぬいだ着物の袖は腰にはさみこみ、上半身裸だった。節ははげしく手を振り、身体を曲げる一連の徒手体操を終ると、今度はそばの地面においてあった鉄亜鈴をつかんだ。

かなり大きくて重い鉄亜鈴を、右手で十回、左手で十回さし上げると、顔からも胸からも汗が噴き出た。亜鈴を投げ出し、軽く足をひらくと深呼吸に移る。

まわりの雑木林は、白い柔毛が光る新葉をつけはじめた。櫟の梢には、まだ悴かじんだ枯葉がこびりつき、冬の間の埃っぽく乾いた空氣がまったく消えたわけではないが、空地には新葉がはなつかすかな芳香がただよっている。その香は、深く息を吸いこむと、鼻から肺の中まで入りこんで来た。

深呼吸の終りの方で、節はいっぱい吸いこんだ息を途中でとめる。すると、ふくらんだ胸郭の内側に、汚れない朝の空氣、雑木の間からさしこんで来る光が満ちあふれる。息をとめたまま、節は片手で胸を叩く。胸は十分に厚く、いい音がした。

「はあーッ」

声と一緒に、ためていた息を出す。二、三度その動作を繰り返して、深呼吸が終った。はげしい体操ではずんだ息も、胸の動悸ももうおさまっている。

節は草の上に置いてあった手拭いを取って、丹念に身体の汗を拭いた。途中で手をやすめて、腕を曲げてみる。力瘤が盛り上がった。かなりたくましい腕だった。そのことにも節は満足した。

節は生まれつき身体が弱かった。そのため明治二十二年三月に国生尋常小学校を卒業して下妻町にある真壁第二高等小学校に入学することになったとき、両親は下妻まで二里の道を通学するのは無理と判断して、節を下妻にある母の実家渡辺家に預けたぐらいである。

しかし家から離れていた四年間の下妻の生活が、かえって節を丈夫にした。母の実家は砂沼のそばにある。そこで泳いでおぼれかけたりしているうちに、節の体力はほぼ普通の少年と変りないところまで増した。高等小学校を終えて県立水戸中学校にすすんだころの節は、痩せてはいたが水泳がうまく、巧みに器械体操をこなす機敏な少年になっていたのである。

しかし生まれつきの虚弱な体質が、ふたたび顔を出してきたのもこの時期だった。中学三年のときに、節は大きく体調を崩した。節はそのころ友人たちと御飯の喰べくらべをし、茶碗で八杯も喰べた。それが身体をこわすものになったと家の者にも話し、いまでもそう信じているのだが、一度崩れた体調は容易に元にはもどらず、四年に進級すると、体力の衰えは脳神経衰弱という厄介な病気まではこんで来た。節は、神経衰弱から来る強度の不眠症に悩まされ、ついに水戸中学校を中途退学する羽目になったのである。

退学後の節は、たびたび上京して医者にかかり、また塩原や草津に滞在して入湯加療につとめたりしたが、体調は好転せず、やがて本格的に上京して築地の山田病院に入院した。し

かしそこでも節の衰弱は増すばかりで、たまたま見舞いに來た節の父の友人で国会議員の飯田新右衛門のすすめで、神田錦町の橋田病院に転院する。

節の病状が回復にむかうのはその転院以後で、節はその年の徴兵検査にようやく間に合い、帰郷することが出来た。しかし、むろん検査は不合格だった。

節は眞壁第二高等小学校を卒業するとき、二十八名の同窓の中で首席を占めた。また、県立水戸中学校（当時は茨城県尋常中学校と称した）にも首席で入学した明敏な頭脳の持主だったが、中途退学と言い、徴兵検査の不合格と言い、弱い身体のためには屈辱を嘗めた。病身それも神経衰弱持ちで医者通いをしたり、家の中でぶらぶらしていることは、村の中の聞こえもよくなかったのである。

しかし、ここ一、二年、節はようやく病氣と縁が切れて、体力が充実して來たのを感じている。青白く痩せていた身体に、肉がついた。今年は二月末のまだ寒い時期に筑波山にのぼり、三月の上旬には成田の新勝寺と香取神宮に参詣がてら觀梅、さらに足を下総神崎の親友寺田憲の家までのぼして帰郷した。ひとやすみして三月末には、今度は水戸の北方多珂郡諏訪村の梅林を見に行き、ついでに水木浜に出て遊んだりした。節はそういう旅を好んでいた。

節は、東京根岸に住んで短歌革新ののろしを挙げた正岡子規の弟子である。取りあえずは旧派の歌人たちや、新興の短歌結社ではあっても子規の指導する根岸短歌会とは方向を異にする与謝野鉄幹のひきいる新詩社などを当面の敵として、新しい短歌を創造して行く立場にいた。春先の旅行は、そのための歌材を得るための旅だったが、ほとんどが徒歩で、しかも諏訪村の梅林を見に行った日は、春にはめずらしい風雪に会ったりしたのに、身体の方は何の異状もなかった。

——何ごとも、努力だ。

節は、二十四にしてようやく若者らしい骨格と筋肉にめぐまれて来た身体を、やや陶然と見回す。

身体が回復しても、節は決して油断しなかった。喰べものには氣をつかい、暴飲暴食は当然避ける。一方でよく歩き回り、体操で身体をほぐし、鉄亜鈴で筋肉を鍛える。その成果が身体にあらわれていた。節にはそれが、貴重な収穫に思われる。

もう一度腕を曲げて力瘤をつくったとき、ひとの声がして、誰かが農道をこちらにやって来る氣配がした。節は大いそぎで袖を通し、襟を直して肌を隠した。

空地の入口に姿を現わしたのは嘉七という男である。節の家の小作人だった。嘉七のうしろから、まだ小さい弟の手をひいた嘉七の娘が現われたが、娘は軽く頭をさげただけで通りました。

鍬を肩にかけ、うつむいたまま通りすぎる娘の姿には、子供から娘になろうとする時期の女が示す、ひとに怖じるような氣配が現われていた。だが嘉七は立ちどまった

「また体操ですか、小旦那さん」

嘉七は、目ざとく地面の鉄亜鈴に眼をとめて言った。嘉七はただの小作人ではなく、節が子供のころに、節の家で作男をしていた。村の者は、節と道で行き合ってもむこうから声をかけて来ることは稀だが、嘉七はかならず話しかけて来る。

いまでも何かと節の家を頼りにして出入りしているので、家の事情にも通じていた。嘉七は、鍬を地面におろした。

「はあ、近ごろは丈夫そうになって、いい塩梅でござんすね」

「畑かい？」

と節は言った。雑木林の奥に、嘉七が開墾した畑がある。このあたり一帯の山林は山久と呼ばれる節の家の所有だが、嘉七は開墾を請負って長い間に少しずつ山林を畑に変え、その一部は自分が借りて畑作物をつくっていた。

嘉七の娘がむかつて行くのは、その方角である。大人の笠をかぶり、大人の野良着にきつちりと装っているが、身体はまだ子供のように小さいその娘が遠ざかる姿を、節は見送った。「へえ、そろそろ田んぼにかかるべと思つても、その前に畑を始末しねえと、仕事の決まりがつかねえもんですがすから」

嘉七は日焼けした小づくりな顔に、情けないような笑いをうかべた。

「嬢がおつ死ちんでからは、どうやっても仕事が遅れ遅れになるのせ。ええことはひとつもねえでがすよ」

嘉七が鍬を肩にもどして去ると、節も鉄鉋鈴をさげて道に出た。振りむくと、先に行った娘たちを追つて、つんのめるように道をいそいで行く嘉七のうしろ姿が見えた。

嘉七は一昨年の冬に、女房を失った。墮胎の失敗がひき起した破傷風が死因だったということ、節も耳にしている。

嘉七は婿で、米松という頑丈な身体つきの舅がいるのだが、婿とそりが合わない米松は野田の醤油工場に雇われて行っていた。嘉七は、まだ鍬の使い方も十分に知らない娘を相手に、田畑の始末をつけ、少しのひまがあれば日雇いできりきりと働く。

嘉七は働くのを塵ほども厭わない男だった。嘉七が仕事を怠けている姿を見たことがない。軽い盜癖があつて、節の家に米搗きに雇われて来ると、股引きに二、三升の米を入れて持ち

出したり、また田んぼから夜にまぎれて他人の掛け稲を盗むとかの噂をされる男だったが、節はその種の噂に興味は惹かれるものの、指さしてその盗癖を咎める気にはなれなかった。嘉七は怠け者ではなかった。盗んで楽をしようという料簡でないからには、その盗みは貧しさから来るだろう。

そうは言っても、貧しい者がみな盗むわけではなからうから、嘉七の盗癖はあきらかな犯罪なのだが、嘉七の盗みは、働いても働いても、いつも喰えるか喰えないかの瀬戸ぎわで決断を迫られるような貧しい日々の中で、あるときかたりと心の歯止めがはずれるようなものではないのか、と節は想像する。

そんなふうな解釈が好意的になるのは、節がこれまで、たびたび嘉七の開墾仕事を見ているせいかも知れなかった。

嘉七は、山久の山林を開墾する報酬として、手間賃のほかに米と麦の現物を受け取るようになっていた。小作人の暮しでは、収穫が済んで地主に年貢を払ってしまうと、後に残るのはがっかりするほどに少ない。とうていそのあとの一年を喰いつなぐには足りなかった。不作の年には、当然ながら暮しは一層きびしくなる。

その不足を補うために、彼らは百姓仕事の合間を縫って機敏に日雇い働きに出、そこから稼ぎ出した金で不足の米や麦を買うのである。嘉七が節の家の山林の開墾で結んだ契約は、骨身を惜しまずに働けば、賃金のほかに喰い物の不足分もある程度保証される点で、嘉七に気持のゆとりをあたえるものだったろう。そして開墾がある間は、百姓仕事がひまな春先いっぱいまで、ほかの土地に出て行かなくとも仕事があたえられるのである。

そういう条件のよさもあってか、嘉七はその仕事に精出していた。そして嘉七は、開墾の

仕事が上手でもあったのである。

嘉七は小柄で、見た目には貧弱なほどの身体つきをしているが、その身体がなみなみでない筋力を隠していることは、木株を掘り起こしているところを見ればわかった。

重い唐鍬をふりかぶり、ふりおろす。ぶつりと切り取った土を、嘉七は唐鍬の刃先が裁断した白い地中根もろともに、そっと背後に投げる。またふりかぶって、さくりと切りこむ。土を背後に投げる。嘉七のその動きには、一定した気持のいいリズムがあった。

力にまかせて、唐鍬を軽々とあやつるのではなく、嘉七は唐鍬の重味に乗り、その重味と刃の切れ味とひとつに溶け合って動くように見える。早春の日射しがやや暑すぎる日は、嘉七は上半身裸で仕事をする。そういうときそばで仕事を見ていると、嘉七の痩せぎすではあるがひきしまった腕の筋肉、腹筋、背筋の動きがよくわかった。

嘉七の力は瞬発しては、つぎの瞬間に消える。その動きが作業のリズムを生み出すのだ。嘉七は無駄な力を発散したりしない。そういう嘉七の手にかかると、頑強に土にしがみついた切株も、四方から巧みに攻めたてられて、ついにはそっくり土から引きはがされるのである。

開墾地には、ほかの百姓も二、三人入っている。節は散歩がてら山久の小旦那として作業のすすみぐあいを見回ることがある。だが、嘉七ほど土を掘り起こすことが巧みな者はいなかった。節は、嘉七が竹林を開墾したとき、びっしりと地中に根を張りめぐらしている土を、一坪の広さのままそっくり掘り起こしたのを見たことさえある。

作業に熱中しているときの嘉七はまったく無口で、日ごろのひとの善さと小狡さが同居しているようなあいまいな表情は影をひそめ、顔つきまできびしくなる。目の前の切株を攻め

るのにどう力を使ったら有効か、刻々のその判断に氣持を奪われて、そばで節が見ていてもほとんど氣にならないというふうに見えた。

節には嘉七の盜癖を弁護する氣持はない。ただ、そういう惡癖をうわさされる男が、かくも熟練の腕を持つ農夫であることを、やはり認めてやりたいという氣持になるのである。しかし、ただ漠然とそう思うだけで、嘉七の貧しさも盜みも、節にはどうしようもないものだった。

盜癖を持ちながら、百姓仕事には熟練の腕を持つ男は、律儀でもあった。いまも立ちどまって節と立ち話をかわして行つたのが、その証拠である。

節がもう一度ふりむいたとき、嘉七親子の姿は農道から消えて、やや勢いを増した朝の光が、まだ枯色の濃い道と白っぽい新葉の色がまじりはじめた雑木林を照らしているだけだった。

——それにしても……。

嘉七は、もう少し娘の身なりに氣を配ってやつたらよさそうなもののに、と節は思った。通りすぎるところを一瞥しただけだが、嘉七の娘は、相変らず死んだ母親のおさがりと思われる洗いざらした袷を着ていたようである。あるとき嘉七が開墾仕事にはげんでいるすぐそばの林で、娘が枯枝をあつめて粗朶の束をくくっているのを見たことがあるが、節の記憶に間違いがなければ、娘はそのときも同じ袷を着ていたのだ。洗いざらして、縞目もはつきりしなくなった、色あせた紺の袷。

洗いざらしの同じ物を着てゐることは何もないが、節は村の娘たちには娘たちなりの飾りがあることを知っている。